
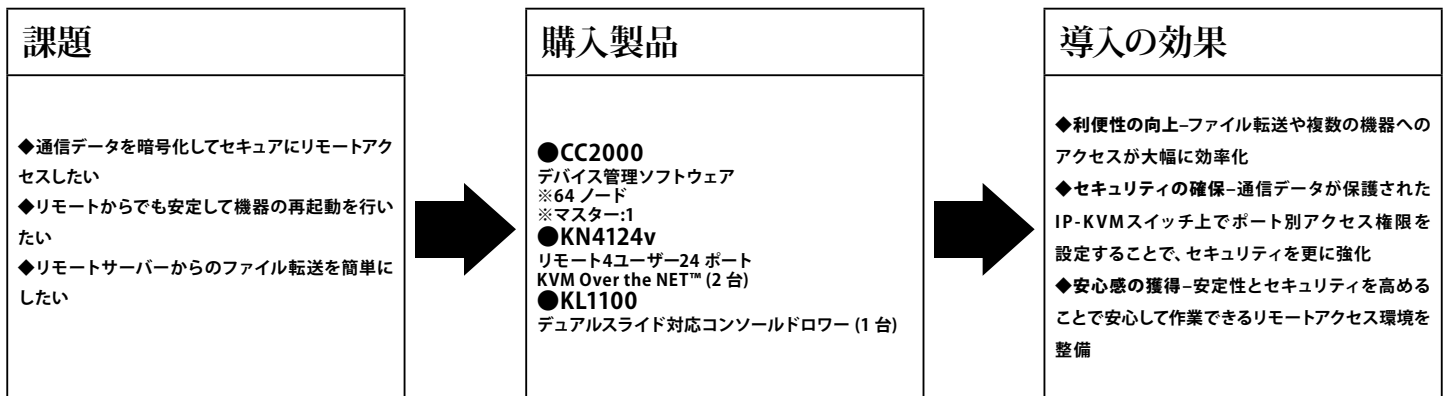


JDS 統合管理ソリューションで安心感のある作業環境を実現

配信システム用の制御・監視サーバー運用にCC2000とKN4124vを導入

	<p>日本デジタル配信株式会社</p>
	<p>日本デジタル配信株式会社(以下、JDS)は、ケーブルテレビのデジタル化支援を目的として2000年に設立された企業だ。ケーブル事業者専用の配信システムを用いて、CS・BS・地上デジタル放送をケーブルテレビ事業者に配信している。衛星と光回線の2つのネットワークの運用・管理で安定度の高いサービスを提供するとともに、CSデジタル放送をいち早くHD化する等、先進的なサービスにも取り組んでいる。</p> <p>また近年では、番組供給事業者やベンダーと協力しながら、この配信サービスのアシストサービスにも力を入れている。2010年には、全国のケーブルテレビ事業者のモバイルサイトを構築・運用する「Cable Gate サービス」を提供。また、2011年には、ケーブルテレビ事業者向け業務システムを統合し、クラウドコンピューティングを利用して提供する「統合クラウドサービス」を始動。ケーブルテレビ事業者を様々な角度からサポートすることによって、加入者のメディアライフを豊かなものにしていく。</p>



導入前の課題

セキュアで安定したリモートアクセス環境を整えると同時にファイル転送の利便性を高めたい



JDS オフィスロビー

JDSでは自社が提供するサービスのために様々な機器を使用している。安定したサービスを実現するために、これらの機器に対してサーバーを別途立てて、稼働状況の把握や機器の制御を行っているそうだ。サーバーはJDSのオフィスから離れたサーバーラームに設置されており、オフィスとはVPN回線につながっている。かつて現場ではKVMスイッチを使ってコンソールを集約していたそうだが、当時使用していたのはリモートアクセス非対応のKVMスイッチだった。このため、急を要する事態が発生した場合は、各サーバーにインストールされているVNCソフトウェアを使って遠隔から対応していたそうだ。

運用する中で、担当の船渡氏(同社サービス運用部アシスタントマネージャー)には、いくつか気がかりなことがあった。VNCで通信されるデータは暗号化されていないため、セキュリティが保たれない。また、ソフトウェアベースのリモートアクセスではセッションが切断されると操作が続行できないというのも問題になっていた。過去には遠隔からの再起動に失敗し、結局、現地へ赴いて作業しなければならなかったという苦い思い出もあったそうだ。さらに、従来のリモートアクセスではログファイルを取得する方法がなかったため、FTPサーバーを用意したり、Webメールでファイルを転送したりしなければならない点にも不便さを感じていたという。

購入のポイント

デュアル NIC やバーチャルメディアに対応した KN4124v 2 台を CC2000 で統合



CC2000
デバイス管理ソフトウェア



KN4124v
リモート 4 ユーザー-24 ポート KVM Over the NET™

そんな折、件のKVMスイッチが故障し、新たな機器へのリプレースが迫られた。船渡氏は次に導入するならIP-KVMスイッチと決めていたようだ。IP-KVMスイッチであれば、前述のセキュリティや通信の安定性にまつわる問題も一挙に解決できるのがその理由だった。

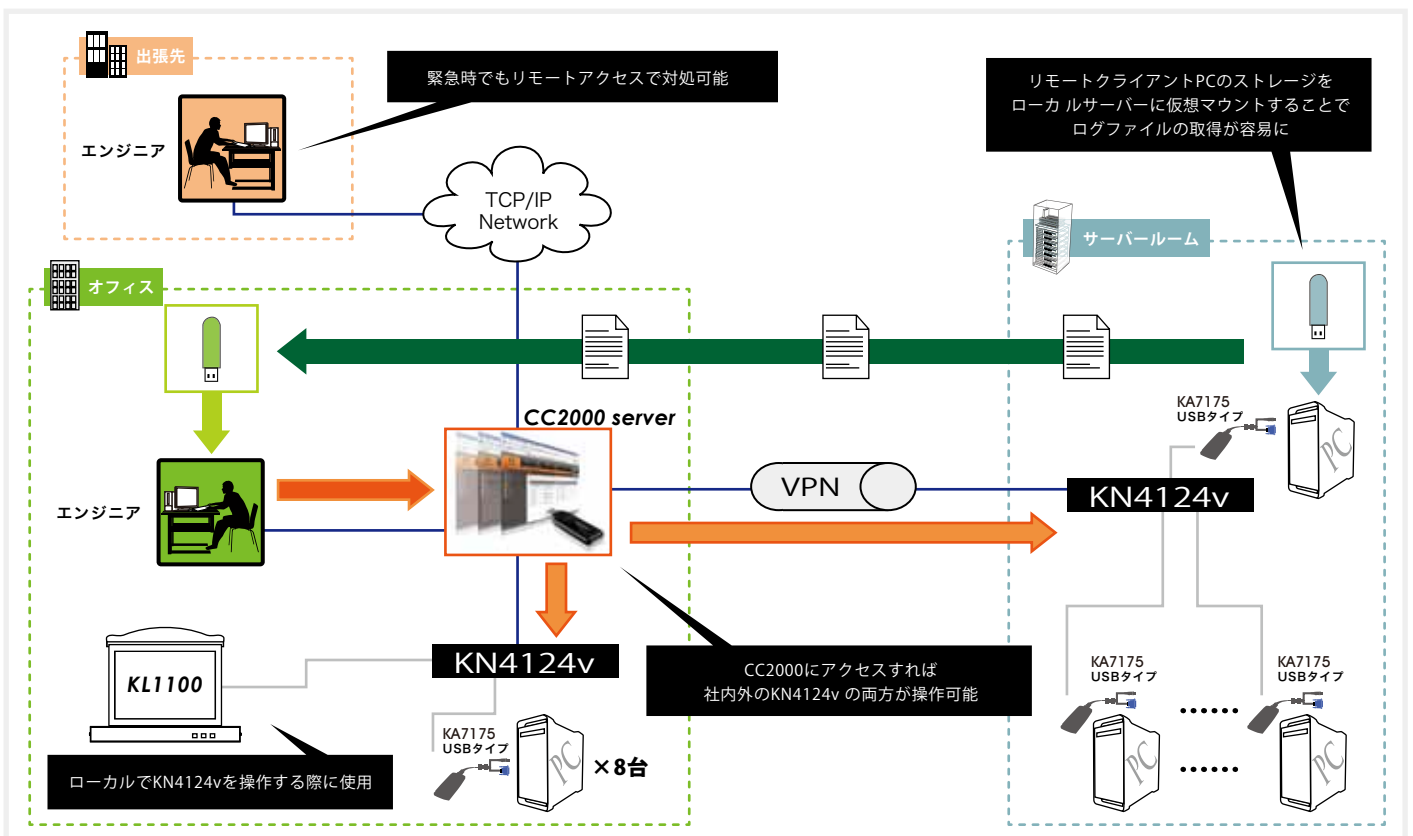
製品選定を進めていくうちに、ATENのハイエンドブランドALTUSEN(オルトセン)のIP-KVMシリーズ「KVM Over the NET™」のKN4124vが要件に適していることが分かった。バーチャルメディア機能を使えば、担当者のリモートクライアントPCに接続されたUSBメモリ等のストレージをローカルサーバーに仮想的にマウントできるため、ログファイルの転送問題もクリアできる。

他社の競合製品とも比較した結果、NICが2箇所搭載されている点が決定打となり、ATENのKN4124vを採用することが決まった。デュアルNICであれば、IPを二重化させることもできるし、違うIPアドレスを割り当てたりすることも可能である。

そして、これと同時に、複数のKNを統合管理できるソフトウェア「CC2000」も導入する運びとなった。CC2000サーバーに一度サインオンすれば、オフィスとサーバールーム両方のKN4124vに対してアクセスが可能になる。将来、KN4124vを増設することになってもCC2000経由でアクセスすることに変わりはない。

最終的には、これらの統合管理ソリューション、そして、オフィスのKN4124v用にコンソールドロワー「KL1100」を1台導入するというでリプレースの話がまとまった。

構成図



導入の効果

リモートアクセスの「質」を改善することで安心感のあるリモートアクセス環境へと進化

JDSでは、もともとVNCを利用していたこともあって、比較的早い段階からリモートアクセスの利便性を感じていたが、今回ATEN製品にリプレースしたことによって、その利便性を更に高めることができた。

そして、安定性とセキュリティも同時に向上させることで、従来の方法にはなかった「安心感」を得ることができたのが最大のメリットだったそうだ。

JDSでは、KN4124v側でユーザーアカウントを管理者、一般ユーザー、協力会社などに分け、更に各ユーザーに対してポート別のアクセス権限を設定。作業に十分な環境を提供しながらも、必要以上に権限を与えないように、アクセス権限の設定をカスタマイズした。こうすることで、IP-KVMスイッチが本来持っている安定性やセキュリティの高さを一層強化している。

これまでの方法では、作業のたびに「セッションが切れて操作が中断されたらどうしよう」「データが傍受されたらどうしよう」という不安が付きまっていたが、今回の導入でリモートアクセスの「質」を高めたことにより、こういった懸念を解消し、安心して作業できる環境を構築できたのだ。

感想・今後の展開

他部門では KN シリーズのパネルアレイモードを監視に活用。CC2000 の更なる展開にも意欲



キーボード部分を収納した状態で監視ができる
ドローワーKL1100(上)と
IP-KVMスイッチ KN4124v(下)

メインで使用しているCC2000とKN4124vはもちろん、コンソールドローワーKL1100も便利に感じているとのこと。ローカルでの操作に必要な機能を備えていながら筐体が軽いので設置がしやすい。また、キーボードを使用しない時には、左の写真のようにLCDパネルだけでモニタリングすることも可能だ。

JDSでは本記事で紹介したKN4124v以外にも、他部門で同シリーズのKN2124vを導入している。ここでは「パネルアレイモード」を使って、各サーバーのコンソールを大型スクリーンに同時表示してシステム監視を行っているとのこと。画面の状態変化が一目瞭然で迅速に対応できるとあって、重宝されている。

導入機器にも慣れてきた今、次なる目標は、「統合管理ソフトウェアCC2000の更なる活用」だそうだ。このCC2000には、これらOver the NETシリーズの機器だけでなく、ブラウザインターフェースの管理画面を持つプリンターやファイアウォール等の機器も統合できる。船渡氏によれば、放送用の機器でもこういった管理画面を持つものは多いとのこと。将来的に機器が増えた場合でも、CC2000でアクセスを一元化すれば操作に迷うことはない。今後も機器の集約にこのソフトウェアを活用していきたいと話している。



一面に各サーバーのコンソールを同時表示できる
パネルアレイモード(イメージ)。
画面変化が一目瞭然なので監視に最適